二人だけの劇場 セザンヌ

35周年記念公演

フランス喜劇

モリエール作 「町人貴族」

演出・脚色：遠藤久仁子

写真：佐々木思郎

セザンヌの道

記者　井上理砂子

セザンヌは、一滴の水だ。

東九条の本屋の２階。小説や詩集が並ぶ稽古場に暗幕が張られ、そこが小さな劇場になる。あるいは、円山公園の桜の下。そこが舞台も客席もない劇場になる。

それは何とささやかで、控え目なことだろう。しかし、ふと足を止めた人々に、セザンヌは種をまく。強い陽光に水たまりがなくなるように、いっときは姿が見えなくなっても、雨となり再び大地に降る。人々の乾きを癒す、それは一滴の水のようだ。

セザンヌは、ひと筋の光だ。

遠藤久仁子さんら俳優たちが紡ぐのは、人から人へと語り継ぐべき物語だ。幸せになるために生まれてきた人々の苦境に寄り添う。人生の一瞬のきらめきを刻印する。国境も性別も超えて分かち合える共感の物語を、セザンヌは常に演目に選んでこられた。

観るたびに、心打たれる。それが過酷な物語であっても、帰り道には不思議な幸福感に包まれる。私ちの人生を励ましてくれる劇団でもあるのだと実感する。夜を照らし、心に灯をともす、それはひと筋の光のようだ。

セザンヌは、一本の道だ。

長い道程は平坦ではなかった。劇団員の病や急逝など、志を試すように過酷だった。まるで十字架の道行だ。それでも、セザンヌは折れない。倒れない。その姿が俳優の卵たちを引き寄せる。研究生が次々と舞台に立つ。遠藤さんや浜崎さんの託すバトンは、しっかり次代へと手渡されている。素晴らしいことだと思う。

３５年間、一つ一つの舞台をありがとうございました。そして、これからの日々を心から応援しています。

セザンヌは果てなく続く一本の道。その道はたくさんの人々の人生に続いている。

二人だけの劇場セザンヌ　35 周年記念公演
モリエール作「町人貴族」

2016 年 11 月 6 日（日）　P.M.5:30 開演
於：龍谷大学アバンティ響都ホール

12 月 25（日）　A.M.11:30 開演、P.M.4：00 開演
於：セザンヌアトリエ（要予約）

二人だけの劇場セザンヌ 35 周年記念公演にあたって

主宰　遠藤久仁子

永い間の皆様方の暖かい励ましにより、多くの苦難や喜びを乗り越え、今年、「二人だけの劇場セザンヌ」35 周年記念公演を迎えられますこと心より深く御礼申し上げます。

又円山野外公演も共に 35 周年を迎え、セザンヌアトリエ開設 10 周年を迎えます。

何かを貫くと言うことは、共に多くの犠牲をも伴い、辛く悲しいことでございますが、その辛さに耐えられず恐気を伴うバリーコリンズ作「審判」島之内月曜劇場公演の連続の中（出演 浜崎満 3 時間に及ぶモノローグドラマ　1983 年大阪文化祭励賞受賞）只々これをやりとげなければならないと言う一念の中、村田稔、遠藤博圭、劇団員と共に歩んできた 35 年は決して幸せな日々ではありませんでしたが、一人の観客の前で 3 時間 7 万語に及ぶモノローグドラマ「審判」を演じる浜崎の姿は、私の心に焼き付き、芝居は動員そのものでなく（動員は大切なものですが）表現者が何を、どう演じ続けるか、又、少人数の公演を怖れてはならないと言う想いの中、定期公演ハイドンサタデーシアター、上野英信作・千田梅二版画「ひとくわぼり」巡回公演、子供達に贈る小さな劇場、芸星文化交流協会公演、ししくフリースペース一週間劇場、セザンヌアトリエ公演（現在継続中）、円山野外公演（現在継続中）、依頼公演と、1400 回近くに及ぶ公演を行って参りましたが、残念なことに浜崎は脳腫瘍手術の後、認知症を発症し 2015 年 80 才にて引退、（70 才～ 80 才まで体調の良い折り出演）、2007 年村田稔逝去、その間後進の指導に心を傾けて参りました。お陰様にて一同、力をつけてきておりますこと何よりの幸せでございます。

二人だけの劇場セザンヌ 35 周年記念公演は精神文化発展を共に願い精進を続けております後進の披露公演にさせていただきます。

力不足、未熟な点もございますが、どうぞ暖かいお目にてお見守りいただけますよう心よりお願い申しあげ、今後も関係者一同精神文化発展（人々が心の豊かさを失う時、それは共に国の衰退につながる）を希求し、一歩一歩、歩みを進めて参ります。

久々の喜劇公演でございます。

笑って、そして考え、楽しんでいただけましたら幸いでございます。

遠藤久仁子
俳優・演出
モナコ国際映画祭（2008 年）最優秀新人賞受賞
日本演出者協会会員
中学校 1 級・高校 2 級社会科教員免許

「町人貴族」作者 モリエール（1622 年～ 1673 年）ついて

遠藤久仁子

今回のモリエール作「町人貴族」は 1670 年 10 月 14 日、パリ近郊のシャンポール離宮にて初演。初演の際ジュールダンを演じたのはモリエール自身であった。

文学・哲学・法律を学び国家弁護士として法廷に立つ肩書きを持つが無類の芝居好きで、いかに困っても苦しんでも芝居だけはやめられなかった人物であり、生涯は決して始めから終わりまで彼に微笑することはなかったが、劇詩人としては大成の天才にして、しかも思想的には次の時代を準備した大闘士でもある。

彼は役者･作者･演出･座長として 12 年間に及ぶ巡行公演の間に芸術家として社会人として一流の名声を得て、悲痛にしてしかも深刻なる快活さを表現するフランス最大の喜劇作者となる。

又彼の作品はほぼ全作品を通じて喜劇作者として公衆を楽しませる役割よりも、むしろ人間に味方して（もし人間を描かんと欲するなら自然に従って描写せねばならぬ）支配階級より敵視される大闘士となってゆく。

晩年まで病に苦しみながらも尚自然の謳歌者として舞台に立ち続け、舞台で倒れた 52 才の生涯である。

彼が昇天して約 350 年の歳月の中（日本 江戸時代 前期）、今尚彼の言葉（台詞）は現代に生きる我々に問いかける力を持つ。

例えば音楽の先生の台詞「戦争は人間と人間の間に協調が欠けているから起こる。そうでしょう？」「すべての人間が音楽を習うようになれば、みんな一緒に調子を合わせることができる。そうなればこの世に永遠の平和が訪れるではありませんか？」

現代ではおとぎ話のように聞こえる言葉ですが、そのおとぎ話のような言葉の中に、人間の在るべき真実の姿がかくされているのかも知れません。

又プライドの間でゆれ動く人間模様の描写は現在に生きる我々そのものである。

私の前身「劇団すみれ座」（小野登代表）での初舞台もモリエール作品、チェーホフ作品であり、私を新劇の世界にいざなってくれたのは、故郷筑豊（炭鉱の町）での人々の人間模様、モリエール作品、チェーホフ作品なのかも知れないと考える昨今である。

無謀な大作公演になるかも知れませんが若い人達の力を信じたいと考えます。

（参考文献 岩波文庫 鈴木力衛訳 町人貴族 他）

スタッフ紹介

演出・脚色：遠藤久仁子
演出助手：中武題
照明：片浦正和
美術：田中一樹
　　中武すみ江
舞台監督：遠藤博圭
　　隅谷和哉
作詞・作曲・歌：吉井多美子
ピアノ演奏：中武裕華
バイオリン演奏：小西淳子
宣伝美術：佐々木思郎
ビデオ撮影：対馬昭
制作：塩見順一
　　坪山正文
衣装：テーラーロダン 寺西愛子

「光、ささやか」

照明家 片浦正和
（町人貴族照明担当）

光はかたちや重さがないので、触って存在を確かめることはできません。では、どうやって認識するのでしょうか。
光は、放射線（α線・γ線）や電波の親戚で電磁波と呼ばれるもののひとつです。これらは波となって進む性格があり、寄せてかえす一往復する直線距離を波長と呼び、その長さはまちまちです。
電波は 0.000,1 m (メートル) から長いものでは 1 ｋｍ以上あり、放射線は 0.000,000,000,001m 以下と非常に短いものを指します。その間の波長を持っているものを光といいますが、その中で、0.000,000,38m ～ 0.000,000,78m の狭い範囲の光を可視光線と呼び、このわずかな光のみを人間の眼で観ることができます。この間の長い波長から短い波長にかけて赤・燈・黄・緑・青・藍・紫の色に識別され、これを太陽のスペクトラムといいます。
（ちなみに 0.000,1m ～ 0.000,000,78m が赤外線、0.000,000,38m ～ 0.000,000,000,001m が紫外線です。）
このことを想うとき、ぼくは眩暈に似た感覚に襲われることがあります。人間の長さの感覚からすれば、なんて光の奥ゆかしいこと、素敵なこと。そして、舞台で光をデザインするということは、さらにもっとささやかなこと。

自作品に向き合って思うこと

美術家 田中一樹
（町人貴族美術担当）

わたしは制作するにあたって、アイデンティティとか憑代のような、揺るぎない考え方をもって創りはしないし意識したこともない。その時々創りたいものを気の向くままに変節しながら造るだけである。後に写真をならべてみると愛欲、悲といった偏った情念で連綿とつながっている。時には情念からはなれて創ることもあるのだがこころ根に沿わないので続かない。結局元の木阿弥である。飽きもせずいや飽きながら情念三昧である。

よくアートは世界を変える力をもっているとか世界言語というけれど、そうたやすく信じてもよいものか。個人にあたえる波紋はあっても世界を変えるほどの力はない。あって欲しいと個人的には願っているが自己矛盾に墜ちている。そこまでアートに成熟した力があるとは今は思っていない。限られた表現の中で生身のいのち、情念を謳い、乱舞したいと思っている。

いいものを創りたいと日々綿のような壁に挑んでいる。ただ心がけていることは良くできているものを創ろうとは思わない。バラックの腐臭漂うような手わざの粗雑さを残した、一見なにも技を感じさせない、できの悪い作品が理想だと思っている。

誤解を避けるためあえて述べるが伝統工芸が悪いといっているのではない。誤解のないように。

よく人にいいご趣味をお持ちでといわれる。世界を変えるほどの力はないけれど一人二人の人間の考えを生かしたり殺したりする力は持っていると思う。つまり小さなナイフをこころの奥に持ってしまっているのである。暗い片隅で恐ろしさに時々ふるえるわたしがいる。アートがもし世界を変える力を持っているならそれはそれで恐ろしい。わたしはいい趣味などとはとても思えないのである。

自作品を多くの人に識ってもらいたい。そのために有名作家になって名をあげたい。切望もしている。それを人前でどうどうといえない。卑屈で照れくさ屋の小心者である。では肩書をどうするのか時に問われる。自分が作家、美術家、アーティスト、造形家などと思ったこともない。創りたがり屋では相手にされそうもない一応美術家と名乗っている。どこまでも卑屈である。

「町人貴族」　出演者紹介

湖空雄大
：ジュールダン 役

江指由起代
：ジュールダン夫人 役

西田梓
：リュシール 役

新納絹子
：ニコール（女中）役

曽我部勇介
：クレオント・哲学の先生 役

溝江拓斗
：コヴィエル（クレオントの従僕）役

中武題
：ドラント(伯爵,ドリメーヌの恋人)役

新井安子
：ドリメーヌ（侯爵夫人）役

遠藤久仁子
：ダンスの先生・大僧正お付き 役

乾和広
：剣術の先生・大僧正 役

矢木雅人
：音楽の先生・仕立屋職人 役

大西甫美
：仕立屋親方・料理人 役

中武裕華
：音楽の先生の弟子 役

吉井多美子
：女性歌手 役

小西淳子
：演奏者 役

「二人だけの劇場セザンヌ」

初めてセザンヌを訪ねて10年ほどの歳月が流れた。
ここでは幾ばくかの時と共に、一人の人が演じ手へと変わっていく。
その瞬間に出会うこと。その瞬間を分かち合えること。
それを励みにまた通う。
扉は今日も開かれている。　　佐々木思郎：写真

1幕 ドリメーヌ(侯爵夫人)との会食に向けて仕立て屋に注文した服に袖を通すジュールダン

「町人貴族」シーン紹介

3幕 リュシール(娘)の結婚相手はトルコの貴族と、夫人とニコール(女中)に語る

1幕 貴族に憧れるジュールダンは、剣術、ダンス、音楽、哲学の先生を雇うが・・・

2幕 クレオントは従僕コヴィエルに、リュシール(ジュールダンの娘)は女中ニコールに相談する

3幕 ドラント(伯爵)とドリメーヌ(侯爵夫人)を自宅に密かに招き、夫人に見つかる

永年お世話になりました諸先生方、皆様にこれからの日本を背負ってゆく若い方々へのメッセージ及び劇団との思い出等ご寄稿いただきました。
永年に渡りますご厚情心より御礼申し上げます。

遠藤久仁子さん、そしてお仲間の方達へ

児童文学者　あまんきみこ

遠藤久仁子さん。過日はセザンヌアトリエまで行かせていただいて、ありがとうございました。何か一文をと言われて、演劇を殆ど知らない私は、どうしても書くことができず、せめて稽古場の空気を感じたくて、「オジャマ虫」になる無理をお願いしてしまいました。それが実現でき、本番さながらの熱気の場に居あわせたこと、感謝しています。

今日は朝からよく晴れた空。セザンヌ日和ですね。
5 月 14 日、円山公園ではもう『野外 35 周年記念公演』が始まっている時刻です。処：しだれ桜前、入場無料、午後 3 時開演で、沢山のかたが集まっていますように。
劇団員揃ってのご挨拶もすみ、初めの詩『巡礼の道』を演じておられる頃かしら。次は『ひなの祈り』、このあとは『花咲き山』『野ばら』、そして『ニラ和尚さん』とつづくことでしょう。あの稽古場での、みなさんの声、表情、仕草に惹き込まれた時間が、私の胸に甦ってきます。

遠藤久仁子さん。そして、ともに同じ世界をめざしているお仲間の方達。
創立 35 周年、おめでとうございます。
記念公演はモリエール作の『町人貴族』とのこと。わくわく楽しみですね。
35 年、演劇に思いを注ぎ、一歩一歩、歩み、これからも歩み続けられる――そこには、私など想像もつかない、魂ごと、身体ごとぶつかる苦しみや痛みがあるでしょう。それ故にこその深い喜びがあることでしょう。
時には、立ち止まってもいい、あともどりしてもいい、けれど歩かねば、歩き続けなければ、それぞれの道はできないのです。
みなさんのこれからの一歩一歩に、明るい光がそそがれ、爽やかな風がふきますように心よりお祈りいたします。

「二人だけの劇場セザンヌ」35 周年記念公演にあたり

人形劇団「紙ひこうきⅡ号」主宰　伊藤健佐久

お二人（浜崎満さん・遠藤久仁子さん）に初めてお会いしたのは京都の喫茶店である。
知人に連れられて入った店内に白い衣装でカウンターに座っておられた。
スポットライトに照らされたかのような空間に、お二人は静かに、誰もが近寄りがたい劇の始まる前のひとときを楽しんでおられるように座っておられた。
やがて劇が始まった。
二人だけの劇場の「二人」の言葉には、演ずる人と観客という意味もあることを私は最近知った。
私は他の観客同様に劇の間、同じ空間で、同じ空気を吸っていた。
私は今でもその時間を、珈琲の香と共に一枚のスナップ写真のように記憶している。
みんなと共に一つの空間の中で確かに私は生きていた。
その後いくつかの劇を見た。
誰かが宗教劇のようだとも言われたように、常に劇の中には優しさと思いやりがあり、反戦と愛と人

の生き方を真摯に問い続ける劇を見せていただいた。
　その「セザンヌ」が今回モリエールをするという。
「町人貴族」という喜劇をするという。
「なんでモリエールを？」
私はすぐにでも聞きたい衝動に駆られた。
だが、今まで「セザンヌ」の劇に対する姿勢がブレたことはない。
そう考えた時に答えはおそらく劇を見ることで解決されるのではないかと、思うようになった。
また一枚の新しいスナップ写真を脳裏に焼き付けてくれるのではないかと私は期待している。
　今年は 11 月が待ち遠しい。

演劇により新たな能力が開花する

株式会社 SSM 常務取締役　江指正夫

　私が小学生の頃、学芸会で鼻の下に綿を頭には画用紙の冠を付け、二言三言のセリフに緊張し、恥ずかしさもあって自らが笑ってしまい、その鼻息で綿が落ち爆笑の王様になった事を思い出します。
それ以来、演劇というものを身近に感じることはありませんでした。
　一方、妻はボランティアで朗読を始め、舌の長い私には到底真似のできない滑舌の良さを武器に、いつの間にかセザンヌの研究生となり、遠藤先生ご指導により、一人芝居を演じるまでとなりました。
いつの間にか妻は私が知らない私が及ばない能力を開花させていたのです。
　初めてセザンヌの公演を観に行き遠藤久仁子さんの迫力に感動した事を覚えております。
遠藤先生が演じる世界に入り込めたと同時に、演じ切るという強い意思をも感じ取ることができました。
人前で演じ、人をその世界に引きずり込み、感動を共有させる力は、恐らくよほど自分を追い込んで自分が納得するまで努力を重ねないと得られるものではないと思います。
しかし、そういう努力を感じさせる事なく、演目の世界に入り込ませ、その内容に感動させる力を持っているというのは素晴らしい能力だと思います。
　セザンヌには学生、社会人、主婦と年齢層の広い団員がおられ、純粋に表現し、演ずるというひとつの目的に集中しておられます。
セザンヌには自分の秘めた能力を演劇を通して開花させようとする人が集まっているとも言えます。
セザンヌはどの年代の劇団員に於いても演劇により新たな能力が開花し、自己の殻を破ることを学ぶ場であると思います。
　妻はまだまだ卒業するつもりはないようです。
　王様の役も十分こなせる演技能力をきっと得ることでしょう。
　遠藤先生、今後ともよろしくお願いいたします。
　二人だけの劇場セザンヌ　創立 35 周年、誠におめでとうございます。

35 周年を迎えられて

大西タイヤ販売株式会社 大西和彦

　本当にうれしい事です
　初めて久仁子先生の舞台を見せていただいたのは、秋田弁で 1 人の女性の役だったと思いますが、すごく長いセリフで難しい発音。良くやりこなされたのを今でも忘れません。
　その後二人だけの劇場セザンヌを立ち上げられ浜崎満さんと二人で、ししく、 地蔵院等、色々な所で公演され、又映画にと取り組まれモナコへと行かれました。女優新人賞を受賞され、すばらしい事です。
それから後には、生徒さん達の指導。その中には嫁まで入会させていただき私は心配で、皆様に迷惑をかけるのではと思って居りました。でも頑張っている姿を見て少しは安心致しました。
　私も陰ながら応援して行きたいと思っております。

４０周年、４５周年を迎えられる事を心から願って居ります。
「町人貴族」の舞台を楽しみに致して居ります。

祝　「二人だけの劇場セザンヌ」御中

詩人　遠藤カズエ

三十五周年おめでとうございます。遠藤久仁子様、浜崎満様、団員の皆様心よりお祝い申し上げます。この劇団を知った当初「二人だけの劇場」というのが、立ちあげられた遠藤さんと浜崎さんのお二人を、指しているのだと思っていました。ファンの方ならすでにご存知でしょうが、この意味は「演ずる私と、観客のあなたの二人」を称している。それほどまで、来場のおひとりおひとりを大切に、言葉（言霊）をまっすぐに届けたいとの表れである。来場と書いたがアトリエの他、円山公園の公演も三十五年続いている。小さな細々と公演を続けてこられた劇団と、単に捉えてはこっちが火傷をする。三十五年という年数はその芯の太さと、しなやかさがないと存続に至らなかったであろう。あのしだれ桜の側で行われる朗読劇。私が驚嘆するのは、むしろこちらの野外公演の方である。始めるのに何らお触れもなく、静かに厳かに淡々と始まってゆく。一瞬にしてそこは劇場となる。ピ～ンと張り詰めた空気に、呼吸を整え姿勢を正し、舞台となる空間に、演者は一歩を踏み出す。囲みのない場で毅然と立っていなければならない。落語家殺すのに、欠伸ひとつでいいという。彼ら、彼女らも然りである。装置なし、無料であるが故にぷいと顔を背け、立ち去ってしまわれれば終りだ。ここで先の「二人だけの劇場」が成立する。

久仁子さんと話していた折のこと「お弟子さんが――」と言ったとき、彼女は「う～ん…弟子でもあるけど、仲間です」ときっぱり言われた。だから、そのお仲間の「先生」という声は、本当に親しく敬愛を込めたところに答えがありました。

また彼女はよく“感謝”という言葉を使われる。御来場された皆様にきっと、その思いが通じていることでしょう。

ところで、私も同じ名字です。幾度か、人様から姉妹ですかと訊かれたが、残念ながらと付け加えたい。もし、姉妹であるならどちらが、姉か妹か？　いや、そんなことより、今日のモリエールに乾杯しましょう。

昭和平成の阿国

俳人　甲斐よしあき

遠藤久仁子さんと言ったら、まず思い出すのが、「ひとくわぼり」である。京都に、その公演を観に行ったり、また私たちの仲間が集まり、茨木の大きなホールを借り切り、自主公演を打ったり。共演の浜崎満さんの颯爽とした演技が忘れられないし、遠藤さんの控え目でありながらも、芯の強さを感じさせる演技も忘れられない。あれから 25 年。

私は、俳句作りのために、しばしば京都を訪れ、四条大橋を渡る。その四条大橋の東たもとに出雲の阿国の像がある。私は、阿国像と対面しながら、いつも遠藤久仁子さんのことを思い出している。

春を待つやうに阿国の舞ひ姿　よしあき

もう何句ほどになろうか。遠藤さんを思い出しながら阿国を呼んだ私の句の数は。遠藤さんは、北九州市に近い鞍手郡の出身であるから、かつての炭鉱の町に生まれ育った。さしずめ、「筑豊の久仁子」とでも呼ぼうか。あるいは、「昭和平成の阿国」か。

毎年十二月も末の最終公演近くに、「二人だけの劇場セザンヌ」のアトリエ公演に出かける。たいていは若い友人たちを誘っていく。若者たちに、久仁子さんの演劇に込める一途の思い、姿勢を知ってほしいし、また魂の演技を見てほしいからである。

公演の終了後、毎回卓袱台を囲んでの席が用意される。偶然一緒になった人たちとのよき出会いがある。そんな時、久仁子さんはいつも給仕役である。若い劇団員に、給仕を押しつけたりしない。だが、今演技を終えたばかりである。鬼気迫る一人芝居の後だから、二、三キロは痩せたのではないかと心配する

のだが、疲れた姿を私たちには見せない。
　その「二人だけの劇場セザンヌ」が 35 周年を迎えての記念公演を行うという。何を置いても駆けつけるつもりである。きっと万感の思いの 35 周年記念公演となるであろう。
　遠藤さん、おめでとうございます！

創立 35 周年おめでとうございます

京都労演代表　河副英治

・二人だけの劇場セザンヌ創立 35 周年記念公演、おめでとうございます。
・私が初めて劇場セザンヌと出会ったのは文芸会館での上野英信作・千田梅二版画「ひとくわぼり」の舞台でした。
・浜崎満さんと遠藤久仁子さんの熱演は、これまで数多くの新劇の舞台では出会えなかった不思議な魅力を感じたのを覚えています。
・遠藤久仁子さんは京都労演の仲間でもあり、遠藤さんは労演サークル「セザンヌ」の紹介の中で、私達は精神文化向上を願い、演劇をこよなく愛し、平和な世界を希求する劇団「二人だけの劇場セザンヌ」の仲間たちです。仕事との両立は大変ですが、皆がんばっております、と！
・戦後 70 年の歳月を経て日本の社会はすっかりかわりました。そして憲法改正の行く手には、国民の自由や権利を奪い国家に従わせようと画策する危うい国家主義が見えてきます。
・演劇を愛する私達はこの状況を注視し、平和と文化を守るために、多くの仲間に演劇鑑賞の場を広めることに、演劇は平和を守る力です！

これからの精神療法　― 行動療法と演劇療法 ―

鞍手クリニック 副医院長 心療内科医　熊井三治

近年、休業診断書に適応障害と書かれたものが多く見受けられます。
こういった患者さんには、旧来の精神分析のような精神療法は効果がありません。
会社に行きたい仕事をしたいと思っても、それが出来ない患者さんの精神を分析しても、時間がかかり効率が悪く、また効果もほとんど期待できません。
本人が職場に適応したいのに出来ないのなら、出来るような行動を教える、あるいは訓練するしかありません。
具体的なチームでの作業行動や、対人関係の行動パターンを一つづつ訓練していくのです。
こういう治療法を行動療法といいます。
うつ病や適応障害の患者さんは、自分の思っていることが言えなかったり、また対人関係で怒りを抑圧して、病気になっている人が多くいます。
心療内科の治療法には交流分析のロールプレイング（役割演技法）はありますが、演劇療法というのはありません。
しかしロールプレイングよりは感情反応を伴う演劇をすることが、私は精神的な病にもっとも有効な治療法と考えています。
交流分析に「他人と過去は変えられない。変えられるのは今の自分と未来だけ」という言葉がありますが、感情を込めた演劇をすることにより、今度は逆にその演劇により自分の感情と心が変わってくるのです。
心は行動と同時進行で二つで一つです。
思いや感情と行いは本来一致しているものなのです。
ですから自分の感情や心を変えたいのならば、行動を変えればよいのです。
そして変えるのが難しければ演劇療法をするのが効果的です。
また演劇療法は、近年増加して問題となっているいじめやパワハラにも効果的です。

思っていることや言いたいことを言えなくて、悩んでいる人は今の日本にとても多くいます。
これからも演劇を目指す若い人達が、今後そういった視点でも、幅広く社会でご活躍されることを期待しています。

55 年の歳月を経て

福岡（鞍手）能井元信

私と彼女との最初の出会いは叔母の結婚式でした。従弟妹達と年少の彼女を皆でからかったら腹を立て「もう帰る」と言い出しさっさと荷物をまとめ、小さな身に大きな風呂敷包みをかかえて一人でバス停に向いました。(母親は先に帰宅していました) さすがに心配して送って行ったことがありました。彼女小 1 の時です。意志の強い子だなあとの印象を持ったのを覚えています。それから半世紀に亘り彼女を見てきましたが、彼女の生き方及び行動の基本にあるものは、他人に対する思いやり、慈愛と奉仕の精神によるものではと思われます。中学を卒業し九州を出て京都で福祉の仕事に就く訳ですが、何かをしなければというやむにやまれぬ心の行動の様に思いました。かの吉田松陰を思い出します。なぜ京都だったのか。これは私の憶測ですが、実は明治時代我々の祖父が京都の警察学校に在学中に内村鑑三氏に師事し、田舎へ帰っても敬虔なキリスト教の信者として一生を終えたことに影響されたのかもしれません。

彼女が選んだ演劇の道が 35 年を迎えたと聞きました。現在の社会において信念を持って 1 つの事を継続することがいかに難しいか今さら言うまでもないと思いますが、それをやり遂げて来れたのは彼女が人を信頼し自分を信じて来たからに他ならないと思います。

私はと言えば 34 年間高校で教鞭を取って来ました。全日制に 17 年間、夜間の定時制に 17 年間勤め定年を迎えました。夜間定時制というのは、山田洋次監督の映画「学校」の世界です。不登校の生徒、家庭崩壊等により貧困の状況にある生徒、又若い時に行きたくても高校に行けなかった年配の人たちも入学してきます。彼等のほとんどが昼間仕事をし、夕方疲れたであろう身体で学校にやって来ます。そういった教育環境で生徒達はそれぞれ学ぶことの意義を見つけてゆくのです。卒業生の中には、大学を卒業し教員や養護教諭になった生徒、会社を起こした生徒もいます。彼等に共通していることは、夢を持ち目標に向って努力する姿勢です。今まで見失っていた自分を取り戻し、新たに道を切り開いてゆく卒業生を多く見て来ました。しかし残念ながら途中で退学してゆく生徒がいるのも事実です。人生の遣り直しは本人がそうしようと思った時、それがいつであっても出来ると思うのです。そのような彼等に関われた教師という仕事に携わり本当に良かったと感謝しています。

そして私は今、彼女の故郷の田舎で里山の整備をしています。竹林や雑木林の山も放置すれば人も入れなくなり樹木も育ちませんし良い竹の子も生えて来ません。日の光が根元まで差し込まないからです。自然はそのままが良いという考えもありますが、野山にかかわるとそうではないようです。それは人間も同じで、正しい教え、正しい心の導きがあってこそ正しい人間に成長してゆくのではないでしょうか。

彼女 久仁子氏は現代の血を流し合う出来事の多い世界、世の中を俯瞰することによって、演劇を通じて人の世に愛とは何か、幸とは何か、を訴えているのではないかと思っている次第です。35 年間、色々な事があったことでしょうが、これからも信念を貫き、この不安定な現代に生きる私達に希望を与えて下さい。今後ともますますのご活躍をお祈りします。

「街角エッセー・自立ということ」

教師・駆け込み寺主宰　下橋邦彦

▼つい先日のことだが、よく通っている喫茶店で珈琲を注文し、出てくるのを待っていた。この喫茶は私の「隠れ家」であり、読み物をはかどらせるためにいちばん目立たない席を「定宿」のようにしている。▼その日は土曜日で混んでいた。しばらく待ち、やっと順番がきて、「定宿」でないカウンター席に座り、雑誌に目を向けた。そこに若い女性がやってきて隣の席に座り「アイスコーヒー」を注文した。彼女がアイスを飲み干す前に、やおら声をかけた。「ここは初めて？」「はい」「この店はわりと年寄りが多くて、あなたのように若い人が来るのは珍しい」彼女がカウンターに置いたスマホを見ながら言った。▼「ところで、一日にスマホを何時間くらい触ってる？・・・スマホがいけないなんてことはないよね。ただ、同じニュースでもスマホで見るのと、テレビで観るのと、新聞で読むのとでは、おっちゃんは違うと思うんですよね」「おっちゃんは、若い人と日々接してるけれど、本を読めという言い方はしない。一年に 100 冊目標にして達成した人を知ってるんだけれど、高校までに本を読む習慣のなかった人が急に 100 冊といっても無理。だから“本に親しむ”という接し方でいいと思う。本の始めから終わりまでを読む必要はない、興味ある個所を 10 分あれば 10 分読む、そのあとはポンと投げ出しておく。そのうち読もうという気になったらまた手に取ったらいいんよ」話している間に彼女が 18 歳で、大学に入ったばかりであることがわかった。「あなたは 18 歳なら、選挙となれば投票権があるよね」「投票にいかないといけませんか？」それには直接答えず、「この日本社会で投票したくてもできない人たちがいるのを、知ってる？」「知りません」かいつまんで説明した。▼「ところで、あなたは今家に帰ったらご飯もあるし、寝る場所もあるし、大学にいって学ぶこともできる。だけど、そういうことが当たり前でない人もいるんよね」「えっ、そうなんですか？」「急に一家解散を宣言された 13 歳の人のことを知ってる？」「そうなったら食べること、寝る場所、働く所、全部あなたの肩にかかってくるよね。そんなこと考えたことある？」「その人は 13 歳、あなたは 18 歳。あなたの場合、ああやこうや言うてる場合ではないよね」彼女の顔に不安の表情が浮かんだ。そんなこと考えたこともない 18 年の人生だったのだ。▼彼女はすでに自分が高校生のとき通っていた「学習塾」で、今は講師役をしているらしい。そこで何をどのようにして付けていくか、これまでの親と自分との関係を変えていかなくてはならない、言葉を換えればいかにして「自立」していくか、そういう課題の前にあなたは立っている。18 歳ということからしても、世間に出て働いて自活することは不思議でも何でもない、そうした「責任」を自分で背負って果たしていく年齢になっているということでしょう？▼彼女の表情が次第に引き締まっていくのがわかる。個人として尊重される、その立場を享受するためには、自分で自分を世間にさらして生活していく覚悟がいる、そういう所にあなたは立っているのだ。「これまで 1 時間以上にわたって話し合ったことを胸に刻んで、これからのあなたの進路を考えてみるといいんではないかな」別れ際に、彼女は笑顔となり、「ありがとうございました」と言った。▼同じ 18 歳であっても SEALDs に加わる人もあれば、ボランティアで各地に馳せ参じる人もいる。定時制や通信制の高校に通う人もいる。離島や山間部のＩターン組になる生き方もある。若者としてどのような人生を選んでいくか、そういった「進路」に悩むところから、ようやく「自立」が始まっているのかも知れない。「また、この素敵な喫茶店で会えるといいね」そう言って、彼女の後姿をしばらく見送った。

形象の孤独

画家　菅井滋円

この一月で八十歳となった。若い日には考えてなかった高い位置に立ったことになる。だが何の感慨もない。昨日の続きが今日になった。同じく静かに八十歳が遠くから滑ってきた。また２０年に亘り病との付き合い　これは引っ提げたまま　ここまで来て　またこれから余す日を　旅する人になるだろう。わたしのアトリエにも　自宅にも病の間々に描いていた　作品の山がある。　その一つ一つは病を乗り

越えた到達点で　この機会にそれらを並べることにした。

近過去の作品を出して見ると　共通したテーマが見つかった。　テーマは一つのモノを追い求め　空間を一杯に詰めていることであった。「形象の孤独」　カタチは空間を支配している。
そのカタチは古めかしい絵のように　マチエールを装っている。

長時間かかって描いたためであろう。絵は画面の中で苦労した足跡を残し　多くは銀灰色――シルバー・グレイで汚れている。わたしには画面を汚すことから出発していて　また終わっていた。

今年 1 月「形象の孤独」個展への前後のことを　経緯から話せば　友人のたび重なる勧めがあり　入院前に曖昧なままに病院へと。一月になって病院のベッドの上で　画廊のオーナーから電話を受けた。即刻 OK と答えた　イマは物事を後ろ向いて考えている暇はなくなっていた。だから病院のベッドの上での決断となった。つまり老いたこと　後ろ板をむく時間がなくなったことである。

私が絵を描くことは　だれのためでもない　八十歳のわたしのため　全てがわたしの問題である。
わたしには幾ばくかページが残されている　これからおそらくそのページを埋め続けるだろう。

37 年近くに渡る友人 遠藤久仁子さん、劇団の方々に贈る私の言葉である。

表現者たちのアソシエーション

哲学者　田畑稔

「二人だけの劇場セザンヌ」には演劇世界の「フォークソング」のような魅力を強く感じる。生活者たちの相互のコミュニケーションの延長線上に表現空間を創出する。社会的精神的メッセージが豊かだ。素材や表現様式の多様性や個性も際立っている。

この「セザンヌ」が 35 周年を記念してモリエールの古典喜劇「町人貴族」を上演するという。私のような素人目には、悲劇と異なり喜劇は、とりわけ時代を隔てた場合、アリストファネスでもモリエールでも、演じる側にも観る側にも独特の難しさを伴うように思われる。しかもいつもの「セザンヌ」とは違う大規模な劇である。遠藤久仁子さんがどういう脚色や演出をして、我々にモリエールを届けてくれるか。本当に待ち遠しい。

私は中武題さんを介して「セザンヌ」と出遭った。やがて中武さんの師匠、遠藤久仁子さんのただならぬ志しと情熱がこの演劇運動を支えていることを知り、これもうれしかった。領域は違うが、私も「全員哲学者論」(イタリアの思想家 B・クローチェや A・グラムシからヒントを得た) に立って、細々ではあるが哲学運動を十数年続けているからだ。

今、リベラルな表現・言論文化が危ぶまれている。一部には「くに」への自分の過激な愛着から外国人や「反日」勢力への溢れるばかりの攻撃性を次々汲み出してくる若者さえ見受けられる。「近代人はアソシエイトする技 (わざ) を身につけないと国家の奴隷になる」。これは 19 世紀のフランスの歴史家アレクシ・ド・トクヴィルの非常に重たい言葉だ。「アソシエイトする技」は世代をこえて常に再生産されていなければならない。そして泳ぎでも「技」を身につけるにはまずは「プールへ入らねばならない」。世代を超えて一緒に実践し、先輩たちの経験に学び、自分たちも試行錯誤しなければならない。表現者たちの場合も同じだろう。表現内容や表現様式で勝負するだけでなく、「表現者たちのアソシエーション」へのコミットを通して「アソシエイトする技」を磨かねばならない。この面でも「セザンヌ」の実践に注目している。

「二人だけの劇場　セザンヌ」創立 35 周年によせて

俳優　津賀正則

雪が降り花が咲き、また雪が降る。
そして時は静かに流れて今から遡ること 5 年前、初めてセザンヌのアトリエで、遠藤先生の迫力に満ちた演技と、未熟ではあるが努力の跡がハッキリとわかる後輩（プロダクション）の演技を観て、感動に震えながら家路についた事をつい昨日の事のように思い出す。
それからのちに、後輩の『寿限無』（演目）を観た時、その努力と著しい進化に感心させられたものである。
そこには遠藤久仁子先生の温かく時には厳しいご指導があったことは語るまでもない。
最近では私自身が芸に行き詰まって、後輩にアドバイスを求めることがある。
その都度的確なアドバイスに心強く感じている。
その後輩の滑舌の良さは格別である。
私などは真似のできるものではない。
セザンヌは多様な年齢・職業の方々が集い、遠藤先生のご指導の下、演劇を通して自分の思いを表現している素晴らしい集団である。
11 月には記念公演があると聞く。
本当に楽しみである。
「二人だけの劇場セザンヌ」創立 35 周年誠におめでとうございます。
ますますのご発展を心より祈念致します。

「二人だけの劇場セザンヌ」創立 35 周年記念公演おめでとうございます

文芸社刊 " 人生はオムニバス映画のように "
著者　対馬 昭

私が主宰の遠藤久仁子さんに初めてお目にかかれたのは、劇団が創立してまもなくの頃だったと思います。

三島由紀夫の近代能楽集の演目である「班女」が、京都の文化会館で上演されたとき、舞台関係の打ち合わせを担当させていただきましたが、当時、北海道ご出身の俳優浜崎満さんと福岡出身の新劇女優の遠藤久仁子さんの劇団「三人の会」が、藤本義一氏によって「二人だけの劇場」と命名されて間もなくの頃でした。その名前の由来は一つの舞台 (役者) と観客を意味しているそうですが、現在は、京都市南区の本屋さんの 2 階の 20 畳ほどの部屋が、稽古場兼劇場となっており、芝居小屋という表現がピッタリの素敵な劇場空間です。

遠藤さんは、女優、劇場主催者、演劇指導者、映画プロデューサーとしても多彩に活躍されておられ、高林陽一監督の「涯 (は) てへの旅」(2008) は、モナコ映画祭で監督賞、ナレーション賞を受賞し、遠藤さんも最優秀新人賞を受賞されました。

八坂神社に隣接する円山公園でも長年「円山野外公演」を続けておられます。遠藤さんの執念にも似た情熱と努力、ひたすら京都を舞台に演劇普及に取り組む姿勢は、演劇のエネルギーを確実に京都に齎 (もたら) してきました。そして今も、これからも。

「二人だけの劇場セザンヌ」が企画した高林監督の「愛なくして」(2003) に出演された遠藤さんは、この作品で初めて映画製作も手がけていますが、高林監督の言葉が、遠藤さんの熱意を物語っています。

『遠藤さんは、公演活動に生きてきた本物の演劇人である。そのたゆまぬ創造精神に触れなければ、私は「愛なくして」は作ってなかっただろう』

人生の中で、多くの人と接し、交流しながら、自他共に友人として認めあっていても、同じ一つの熱い思いを共有することは稀なことだと思います。

例えば、演劇や映画などの世界は、一期一会の俳優とスタッフという関係でも、一緒に何か創作に対

する情熱を共有することで、新たな一つの世界を同じ目的をもって行動し、一つの作品として結実します。
その実績を 35 年に亘って積み上げてきた「二人だけの劇場セザンヌ」は、京都の演劇界を牽引してきたと言っても決して過言ではありません。
これからも応援いたしておりますので、ご健康にご留意されてご活躍なさって下さい。

35 周年おめでとうございます

京都労演（事務局長）土屋安見

初めて「二人だけの劇場セザンヌ」の公演を拝見したのは、１９９８年の秋だったと思います。うかつにもそれまで知らなかったその存在を、京都労演の河副会長から教えられ、知人と連れ立って、公演会場「ししくフリースペース」に向かったのでした。
葛野大路九条から暗く細い道を西へ。私たち以外に人影も無く、周辺には一日の仕事を終えた倉庫や工場らしき建物が、黒く深閑と立ち並んでいました。本当にこんなところに劇場があるのかしらと、不安に駆られながら歩き続けたことを懐かしく思い出します。そして道の先に、ポッと明かりが灯り「二人だけの劇場セザンヌ」の文字が見えた時の嬉しかったこと。
小さな入口から階段を上ると、そこは板張りの広い部屋。劇場というより道場のようにも思える空間の、思い思いの場所に座布団で座るのです。壁面中央に垂らした黒い幕の前が舞台で、その日の演目は、孤児と近所のおじさんの心の交流を描いた壺井栄の作品「あばらやの星」、父の死を見つめる娘の手記、山本和夫；詩「巡礼の道」。詩や文学作品を原文そのままに遠藤さんが演じ語る、一人芝居とも朗読ともつかぬ、その二つがミックスされたような独特な世界に、そして何よりも小柄な遠藤さんが発するエネルギーの凄さに圧倒された時間でした。この日の観客は私たち３人だけ。そのたった３人に、全身全霊でまっすぐに向かってこられる遠藤さん。この小さな劇場でこの小さな公演を、魂がほとばしるように続けていらっしゃる遠藤さん自身の姿がまさに「巡礼」のように感じられ、心揺さぶられました。
その後知れば知るほど、遠藤さんが真摯に、営々と続けていらっしゃる活動に頭が下がる思いです。「立派な劇場に行かなくとも、身近に触れられる芝居を」「どんなところでも、本当に伝えたいことがあればそこが舞台」―35 周年、本当におめでとうございます。京都で演劇鑑賞運動を続ける私たちも、演劇の素晴らしさを広げるため、これからもともに進んでいきたいと思います。

継続は力なり

大阪（西成）西田靖弘

「継続は力なり。」という言葉が遠藤久仁子さんにふさわしいと思います。舞台に立つまでの練習はどれだけの時間をかけていくのでしょうか。35 年間は 30 万 6600 時間。そのほとんどを「二人だけの劇場セザンヌ」にうちこまれてきた姿勢は、仏教修行の求道者のようです。
きっと遠藤さんは、世界一幸せな人だと思います。舞台と観客を愛して愛して、ご自身の愛を与えて与えて。幸せな人とは与えられる人だと思います。
遠藤さんのギフトは、とてもたくさんの手紙にあらわれています。ナイチンゲールさんも９０年の生涯で１万２０００通以上の手紙を書いているそうです。遠藤さんの優しさは、「貧しい病人の看護こそ自分の使命である。」としたナイチンゲールさんと似ています。自分の使命感が見つかった遠藤さんと浜崎満さんの役者人生は、世界で一番幸せなんだと思います。
そんな「二人だけの劇場セザンヌ」の演劇に出会えたことに感謝の気持ちでいっぱいです。演劇が終わったあとのささやかな茶話会もとても好きです。遠藤さんと浜崎さんはじめ出演された研究生のみなさんたちと語り合える時間はとても愛しいのです。

久仁子さん、満さんへ

大阪（箕面）　中尾瑞枝

35 周年記念おめでとうございます。

最近は体力も精神力も急速に衰え、92 歳の主人と老老の助け合いで、何とか生活しております。演劇は生の舞台を直接観なけあればなりませんが、遠出が出来なくなり観劇は諦めました。

この 30 数年、貴女にとって、そして浜崎さん、村田君、ヒロカさん、劇団の方々にとっては大変な年月だったと思います。喜びも楽しさも、充実感もお有りだったでしょうが、苦しみ、悲しみに多くの涙もされた事でしょう。しかし貴女は強かった。文学、演劇に対する情熱、行動力で立派に“二人だけの劇場セザンヌ”を作り上げられました。多くの方々のご支援もあったでしょうが、貴女の演劇に対する熱意と努力に、ご理解とご支援を下さったご家族の皆様の愛情あってこそだと思います。

どうぞ、お体を大切に 10 年 20 年先へと、貴女の理想とされる演劇の道を全うしてください。集大成に向ってがんばってください。

不器用の天才　～二人だけの劇場セザンヌ 創立 35 周年を祝して～

カキナーレ塾主宰　深谷純一

「二人だけの劇場セザンヌ」が創立 35 周年を迎えた。これはすごいことである。

多くの困難を乗り越えて劇団を引っ張ってこられた遠藤久仁子さんだが、その魅力とは一体何か？「不器用」。これをおいて他にないだろう。ただし、ここで言う「不器用」とは“抜け目なく立ち回る”の意の「器用」とは対極にあるもので、この「器用」は「器用貧乏」につながる。「器用なため一つのことに集中できず…大成できない」の意である。

それでは、遠藤さんの「不器用さ」を最も象徴するものは何か？　僕は即座に、円山公園のしだれ桜前での公演活動を思い浮かべる。公演といっても、舞台装置があるわけではなく、観客とて少なく、風の日だって炎暑の日だってある。(何と効率の悪いことか) そんな状況下での活動が 34 年間、今も続けられているのだから驚く。僕も何回かそこにお邪魔したが、全力を込めて演技をされている遠藤さんの姿はカッコイイ (？) と言いたいところだが、思わずなんと「不器用な」(要領の悪さ) と、思ってしまった。が、同時に、その「不器用な」姿からは、ひたむき・真剣・一途、といったオーラが立ち上っていた。それは不思議な光景だった。

実は、この「不器用」。人生を生きていく上でとても重要な意味を持つ。つまり、これにかかると、好きなことにはとことん打ち込み、最後まで遣り通す情熱を生み出し、大器晩成につながるという効果があるようだ。もちろん、遠藤さんとて例外ではない。遠藤さんのお仕事の中で、僕が驚嘆したものの一つに映画制作がある。高林陽一監督の「愛なくして」と「涯てへの旅」の 2 本の映画だが、遠藤さんは主演女優として出演しているだけではなく、この映画の企画者・制作者でもある。資金集めから営業活動までされているのである。このことだけを見ても、彼女の粘り強さ、そして何よりもその意志の強さが読み取れる。加えて日本映画の巨匠と言われた高林監督を説得した彼女の人間的魅力はただものではない。

最近の公演では、文学作品を積極的に取り入れておられるが、これは文学の読みを通して人間理解・人間関係が希薄になった現代社会に働きかけていこう、という目論見がおありのこと。僕はそこに大きな期待をかけている。

今回、遠藤さんから「最近の若者に願うこと」という原稿依頼を受けたが、遠藤さんの持つ「不器用さ」こそ、今の、これからの若者に継承してもらいたいもの、というのが僕の結論だ。最近の社会風潮は、効率よく、即効的に成果をあげる人間が重用されているようだ。だが、その反面、ちょっとした困難に直面しても簡単にあきらめ、自身が本当にしたいことが何であるかを見つけられないで路頭に迷う若者が増えている、と聞く。「急がば回れ」である。少々時間はかかっても自分が好きなもの (それが仕事でも趣味でもよい) に「不器用」に打ち込んでいくような生き方をして欲しい、と思う。成果は短

期に実現することはないし、例え実現しても、それは「本物」ではないことを知っておいて欲しい。それこそ、遠藤さんの不器用な生き方は、そのまま参考になる。

遠藤さん！　若い人達のためにも創立 50 周年を目指して下さい。

《二人だけの劇場セザンヌ　35 周年記念　お祝い》

若狭（小浜）松井正

遠藤さんの劇場の名称が「セザンヌ」である原点が何にあるのか、寡聞にして存じません。ただ、画家セザンヌについて知るところは次のようなことです。

セザンヌの後から来た 20 世紀の画家、ピカソ、マチス、モンドリアンなどから “ われらの父 ” とか “ 絵画の祖 ” あるいは “ 神 ” とか呼ばれたのは、セザンヌが表面上の色彩の組み合わせによって成り立つ絵画の仕組みの自立性を主張したからだ、と言われています。印象派から始まり、独自の調和的な色彩を生み出したとも言われます。その奥には自然そのものへの帰依を主張し、すべての伝統 (既存の教え) を忘れ、自然そのものに忠実であれ、と主張したのだとも言われています。

それはまさに「二人だけの劇場セザンヌ」に通じるものがあります。演劇が “ 言葉と仕草 ” で成り立つとき二人だけの劇場セザンヌはそれらの言葉や仕草の自立性を主張し、独自の世界を構築する。その奥には自然への帰依や、既存の伝統を忘れ自然に溶け込もうとしているもののようです。
それは公演場所を野外に選び、公演演目に山本和夫の「巡礼の道」や芥川龍之介の「蜘蛛の糸」を選ばれているところに如実に表れているのだと思っています。

主宰者遠藤久仁子さんが喉のオペを克服し、復帰されての公演、頭が下がります。まさに継続は力なりを地で行く 35 周年記念公演、心からお祝い申しあげます。

二人だけの劇場セザンヌは神の庭園

詩人 野呂昶

このたび、遠藤久仁子さんと浜崎満さんによる「二人だけの劇場セザンヌ」が、三十五周年を迎えられました。芸術性の高い作品を厳選、それを声にのせ、全人格的な表現によって、多くの人々に感動を与えつづけてこられたことは、なんとすばらしい営為でしょう。常によいもの、美しいものを求めての一筋の道を歩まれたお二人と、その仲間の人達に、心からの敬意と尊敬・感動の意を表したいと思っています。

お二人と私の出会いは、もう三十年以上にもなります。わたしの物語絵本「こわれた一〇〇〇の楽器」を上演いただいたことが契機で、以後、縄文詩集「銀の矢ふれふれ」、幼児絵本「いろがみの詩」、詩集 「ふたりしずか」など、数々の作品を取り上げ上演いただきました。

その作品の取り組みは、作品のすべてを自己の内部に取りこみ充分に発酵させ、作品の持つ感動を自己の感動として表現する、独自の演劇的世界を探究しつづけてこられました。私はそれらの演技と共に、その真摯な求道精神にどれほど心震わせたかしれません。

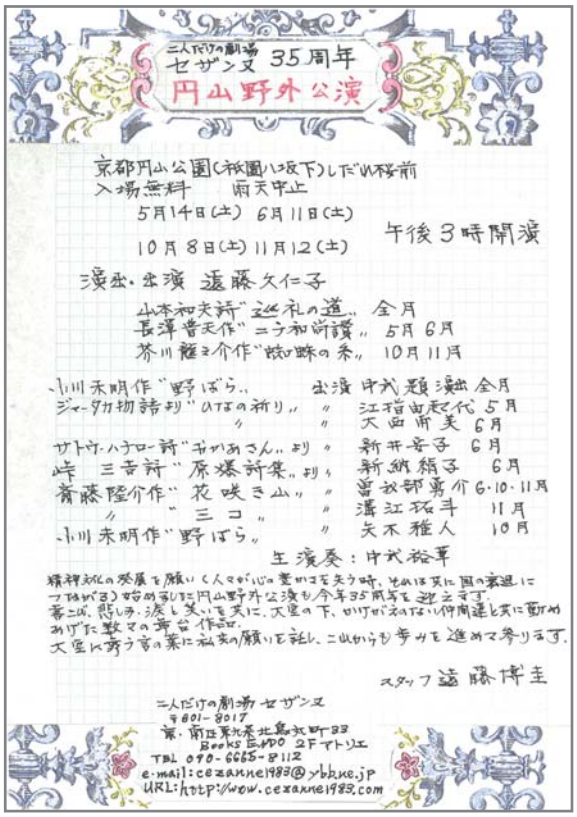
「二人だけの劇場セザンヌ」はそうした活動を通して、多くの後進をも育ててこられました。三十五周年、ほんとうにおめでとうございました。

ギリシャの哲学者アリストテレスは、「美しいもの、よいものを創造しようと集う人たちほど、すばらしいものはない、そこはまさに神の庭園である」という言葉を遺しています。「二人だけの劇場セザンヌ」は、その言葉の通り神の庭園です。

お体大切に、ますますのご活躍を祈念します。

写真で観る円山野外公演の歴史

photo


二人だけの劇場
セザンヌ 35周年
円山野外公演

京都円山公園(祇園八坂下)しだれ桜前
入場無料　雨天中止
5月14日(土) 6月11日(土)
10月8日(土) 11月12(土)
午後3時開演

演出・出演 遠藤久仁子

山本和夫詩"辻礼の道" 全月
長澤普天作"ニラ和尚讃" 5月6月
芥川龍之介作"蜘蛛の糸" 10月11月

小川未明作"野ばら" 出演 中式裕 演出 全月
ジャーダカ物語より"ひばりの祈り" 〃 江指由起代 5月
〃 〃 大西南美 6月
サトウ・ハチロー詩"ガッかあさん"より 〃 新井安子 6月
峠三吉詩"原爆詩集"より 〃 新納稲子 6月
斉藤隆介作"花咲き山" 〃 当故郁勇介 6・10・11月
〃 "三コ" 〃 溝江拓斗 11月
小川未明作"野ばら" 〃 矢木雅人 10月

生演奏：中式裕

精神文化の発展を願い、人々が心の豊かさを失う時、それは真に国の衰退につながる。始められた円山野外公演も今年35周年を迎えます。喜こび、悲しみ、涙し、笑いも共に、天空の下、かけがえのない仲間達と共に歩みあげた数々の舞台作品。大空に奇う音の葉に祈実の願いを託し、これからも歩みを進めて参ります。

スタッフ 遠藤博生

二人だけの劇場 セザンヌ
〒601-8017
京・南区東九条北島北町33
Books Expo 2F アトリエ
TEL 090-6665-8112
e-mail: cezanne1983@ybb.ne.jp
URL: http://www.cezanne1983.com

2010年代
あまんきみこ作「白いぼうし」より
出演：遠藤久仁子

「新劇女優、 遠藤久仁子」

故 高林陽一（映画監督）

一口に三十年と云っても、一人の人間の、一日一日の積み重なりの重さを考えれば、それは容易な時間ではない。勿論、 宇宙的時間の中で見れば、 人の一生は、 一瞬の星の、 またたきにも充たない短かく、 儚いものであることに違いはない。 だが、 一人の個人が経験して行く一日は、 時には途方もなく長い時間であることにも、 違いない。ましてや、 一つの志を持って迎える一日一日の重さは、 地球の重さに匹敵することだってある。

遠藤久仁子という、一人の新劇女優が送った三十年を想う時、それは、他のいかなる女優にも、真似のできない、生きざまであった。 それ程、 遠藤久仁子の「表現活動」に対する唯一無二の信念は激しい。 その確固たる彼女のスタンスが「円山野外公演」を基本とした凡ゆる「表現活動」を支えて来た原点と、 私は考えている。 毎月一回、第二土曜日の午後、京都八坂神社の奥にある円山公園の、しだれ桜前で、彼女が続けて来た表現活動は、とうてい、誰も真似することは出来ない、 一つの「行」といってもいい行為であった。 私は表面的には、 優しく、 どんな小さな作品であっても、 いつも、 彼女の「表現活動」の中に、 人間の業を見てしまう。 私も五十年余り、 曲りなりにも映画の世界に生きて来た。 色んな俳優さんとも、 仕事をしたが、 いわゆる芸能界という世界とは、 最も遠い、 いや、その対極ともいうべき場所に、自らの「女優」としての世界を築きあげて来た彼女の精神力に、深甚の敬意を表する。器用な役者、 巧い役者、 大根役者などという、 世俗的物指しでは、 とうてい計ることの出来ない、 深い志を、 私は、遠藤久仁子の中に見る。 殊に、 昨年、 今年と彼女が体現して来た、 真田正子 作「花の氷柱」（一部・二部）は、遠藤久仁子の真骨頂といってもいい程の感銘を与えた。 今年で劇団創立三十周年を迎えるという。 これから先も、十年、 二十年と遠藤久仁子は、 孤高の女優として歩み続けるに違いない。

（創立 30 周年寄稿文）

写真で観る円山野外公演の歴史

photo

1980年代

1980年代
清水 邦夫 作「朝に死す」より
出演：大澤 輝一、遠藤 久仁子

1990年代
斎藤隆介作「ベロだしチョンマ」より
出演：浜崎満、遠藤久仁子

1990 年代 出演：村田稔

1990 年代 出演：塩見順一

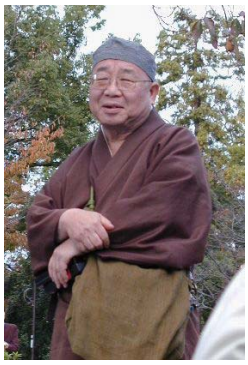
2000 年代
芥川龍之介作「蜘蛛の糸」
出演：浜崎満、遠藤久仁子

1990 年代 出演：田中薫

写真で観る円山野外公演の歴史

photo

2000年代
チェーホフ 作 「結婚の申し込み」より
出演：浜崎満、村田稔、遠藤久仁子、塩見順一、中武題



2000年代
長澤普天住職のお話

2000年代
皆様との交流（公演後）

2010年代

2010年代
出演：佐々木思郎

2010年代
安部公房「赤い繭」より
出演：中武題

2010年代
日本民話「傘地蔵」より
出演：野田伊久代

2010年代
夏目漱石作「吾輩は猫である」より
出演：江指由起代

2010年代

二人だけの劇場 セザンヌ のあゆみ

1984 年 9 月 29 日（日）円山野外公演開始
　チェーホフ作「プロポーズ」、清水邦夫作「朝に死す」、他　（現在継続中）定期公演。
京都円山公園しだれ桜前

1985 年 2 月 9 日（土）別役実作「メーリーさんの羊」、他、京都 HAYDON

1985 年春～ 2001 年春　島之内月曜劇場　バーリーコリンズ作モノローグドラマ「審判」
　88 回公演より出演；浜崎満、制作；遠藤久仁子
　（大阪島之内月曜劇場、京都書院、京都府立文化芸術会館、東北、福島、仙台、松原市、八日市図書館、佛教大学）、他 全 218　回公演

1985 年 4 月 11、12 日 三島 由紀夫作「班女」（京都エンゼルハウス小ホール）

1986 年 12 月 24 日（水）　島之内教会クリスマス
　音楽と演劇による礼拝；聖書朗読　大阪島之内教会

1987 年 10 月 26 日（月）　清水邦夫作「朝に死す」2 回公演
京都 HAYDON

1987 年 11 月 11 日（金）、12 日（土）　島之内小劇場 20 周年記念
　清水邦夫作「朝に死す」、中島陸郎作「自動小銃の銃口から覗いた風景」
大阪島之内教会

1988 年 6 月 22 日（水）
　チェーホフ作「プロポーズ」　大日本スクリーン労働組合 京都支部

1989 年 6 月 10 日（土）～ 1991 年 6 月 8 日（土）定期公演　25 回
　ハイドンサタデーシアター（語りの夕べ）　　京都 HAYDON

1989 年 7 月 14 日（金）
　チェーホフ作「プロポーズ」　大日本スクリーン彦根　研修センター大ホール

1991 年 5 月 12 日（日）兼好忌 双ヶ丘長泉寺　室井犀星作「玉章」

1991 年 12 月 14 日（土）
　斎藤隆介作「ベロ出しチョンマ」、森鴎外作「高瀬舟」、
　野呂昶作「八ヶ岳縄文遺跡幻想」　　高槻立領コミュニティーセンター

1991 年 9 月～ 1993 年 9 月　出演；浜崎満、遠藤久仁子
　上野英信作 版画 千田梅二「ひとくわぼり」巡回公演 102 回
　（福岡、直方市民会館、直方図書館、立岩、小竹、宮田、金田福吉市、鞍手弥生、穂波、芦屋、嘉穂先手、上西公民館、池尻、嘉穂中学校、福岡老人大学、金田福吉教会、若宮解放会館、北九州教育事務所、中間市教育を語る会、稲築町生協、照安寺、種善寺、法照寺、ひまわり園、虫の家、島井、長谷川、松井宅、鞍手解放学級、宗像すかぶら堂、稲築町福祉まつり、まつり嘉穂、島根愛真キリスト中高等学校、大阪島之内小劇場、京都府立文芸会館、京都会館第一ホール、茨木クリエートセンター、八日市市民会館、大日本スクリーン、参学寺、京都八条、陶化、朱雀中学校、南海福祉専門学校、他

1992 年 4 月 9 日（木）、10 日（土）
人見嘉久彦作「手紙・黄浦江変幻」 吹田メイシアター 小ホール

1993 年 7 月～ 1994 年 12 月（毎月第 2 金曜日）定期公演。
子供達に贈る小さな劇場　　京都市地蔵院 18 回公演
野呂昶作「いろがみのうた」他

1994 年 4 月 28 日（水） 小浜働く婦人の家ホール
芥川龍之介作「蜘蛛の糸」、山本和夫作「シルクロードが走る、ゴビ砂漠」、野呂昶作「八ヶ岳縄文遺跡幻想」

1994 年 9 月～ 1995 年 9 月　芸星文化交流協会公演（定期公演 14 回）
芥川龍之介作「鼻」、宮沢賢治 作品、他　　芸星文化交流会館

1994 年 10 月 28 日（金） 京都　河村能舞台
芥川龍之介作「蜘蛛の糸」、他

1995 年 11 月 12 日（日） 京都 北文化会館
森鴎外作「高瀬船」、長澤普天作「ニラ和尚讃」

1996 年 4 月 14 日 聖覚忌　安居院西法寺
長澤普天作「ニラ和尚讃」

1996 年 10 月～ 2003 年 4 月　定期 280 回公演
二人だけの劇場セザンヌ一週間劇場　京都ししくフリースペース
斎藤隆介作「ベロ出しチョンマ」、壺井栄作「あばら屋の星」、森鴎外作「高瀬舟」、上野英信作「ひとくわぼり」、他

1997 年 4 月 13 日　聖覚忌　安居院西法寺
芥川龍之介作「蜘蛛の糸」

2000 年 1 月 8 日（土）、9 日（日） 小浜市働く婦人の家、他
韓国船遭難救護の記念、大森和良作「百年目の再開」

2001 年 3 月 29 日（木）「土曜日の会」20 周年記念集会
鹿島和夫編「一年一組先生あのね」 京都健康組合保養所「きよみず」

2001 年 10 月 2 日　福井町宿　圓蔵寺公演
長澤普天作「ニラ和尚讃」、仏典より「史上の仏、偉大な生涯」

2001 年 10 月 20 日（土） 若狭 明通寺本堂
海のシルクロード音楽祭　山本和夫詩「シルクロードが走る ゴビ砂漠」

2001 年 11 月 17 日（土）京都私学図書館フェア
あまんきみこ作「白いぼうし」 同志社女子・中高清和館 4F ホール

2002 年 5 月 25 日（土）「回想 山本和夫の世界」展　若狭図書学習センター
山本和夫詩「シルクロードが走る ゴビ砂漠」、あまんきみこ作「白いぼうし」

2002 年 10 月 20 日（日）　京都私学中・高等学校国語科研究会公演
　芥川龍之介作「鼻」　精華女子中学高等学校

2002 年 11 月 10 日（日）　ビバ・2002 年私学フェスティバル　産業大学図書館前広場
　鹿島和夫編「一年一組先生あのね」、新美南吉作「ごんぎつね」、安部公房作「赤い繭」

2003 年 6 月 8 日（日）　大阪朗読研究会文化講座　アピオ大阪小ホール
　あまんきみこ作「白いぼうし」、新美南吉作「ごんぎつね」、安部公房作「赤い繭」、斎藤隆介作「ベロ出しチョンマ」

2003 年 10 月 19 日（日）　京都府私立中・高学校国語科研究会公演
　野坂昭如作「赤とんぼとあぶら虫」　平安中・高等学校

2003 年 11 月 15 日（土）　京都私学図書フェア
　古典「竹取物語」より　同志社女子中・高等学校 静和館

2005 年 4 月 23 日（土）　二人だけの劇場セザンヌ 1000 回記念公演
　人見嘉久彦作・高林陽一演出「山小屋で」一幕　京都府立文化芸術会館

2007 年 1 月より現在継続中
　二人だけの劇場セザンヌアトリエ、春・秋定期公演　セザンヌアトリエ

2007 年 3 月 25 日（日）「土曜日の会」25 周年記念
　井伏鱒二作「山椒魚」、くどうなおこ詩「のはらうた」　セザンヌアトリエ

2007 年 4 月 21 日（土）　普賢象桜の夕べ
　あまんきみこ作「白いぼうし」、他　千本ゑんま堂 引接寺

2007 年 7 月 21 日（土）「源氏物語千年紀」の雅
　源氏物語の一人語り　廬山寺方丈

2007 年 8 月 26 日（日）
　若狭詩人山本和夫生誕 100 年記念コンサート
　山本和夫詩「たじま牛」「十字架の島」「親知らず、子知らず」　　小浜市文化会館大ホール

2008 年 7 月 25 日（金）～ 27 日（日）
　村田稔一周忌追悼上映会
　高林陽一監督「愛なくして」「ベンチのある風景」
　人見嘉久彦作・高林陽一監督「「山小屋で」一幕　セザンヌアトリエ

2011 年 7 月 2 日（土）　童謡伝道師の集い（東北地震災害復興支援）
　鹿島和夫編「一年一組先生あのね」　大阪大閤園ダイヤモンドホール

2012 年 2 月 25 日（土）　二人だけの劇場セザンヌ公演
　真田正子作「花の氷柱・Ⅱ」　茨木サポートユニオン with You

2012 年 5 月 19 日（土）
　真田正子作「いくさと青春」　茨木クリエートセンター 1F 和室

2012 年 5 月 26 日　ハロハロファイナル　大阪弥生会館
　下橋邦彦作「突然に帰らぬ人となりし妻、寿子を悼みて詠める歌」

2012 年 6 月 30 日（土）　童謡伝道師の集い
　あまんきみこ作「白いぼうし」　大阪大閤園ダイヤモンドホール

2012 年 8 月 27 日（水）吹田富津西中学校 3 年生演劇教室
　高丸もと子詩「今日からはじまる」活舌訓練について

2013 年 11 月 2 日（土）　京都南図書館スペシャル企画・二人だけの劇場セザンヌ公演
　夏目漱石作「吾輩は猫である」、あまんきみこ作「シャボン玉の森」　　京都南図書館

2014 年 3 月 23 日　春季彼岸法要
　芥川龍之介作「蜘蛛の糸」、野呂昶作 ジャータカ物語より「駿馬」　嵯峨野 阿弥陀寺

2014 年 9 月 14 日（日）　新婦人城陽宮の谷班 愛読者の集い
　太宰治作「葉桜と魔笛」、夏目漱石作「吾輩は猫である」　ぱれっと JOYO

2014 年 10 月 24 日　木津川市立山城中学校公演
　芥川龍之介作「蜘蛛の糸」、夏目漱石作「吾輩は猫である」　山城中学校

2015 年 6 月 7 日（日）　禅林婦人会滋賀支部総会　真野願生寺
　芥川龍之介作「蜘蛛の糸」、長澤普天作「ニラ和尚讃」、野呂昶作ジャータカ物語より「駿馬」

2016 年 1 月より二人だけの劇場セザンヌ 35 周年記念公演準備に入る

尚、資料紛失のため、岡崎中学校、吹田西山田中学校「あばら屋の星」、花背小中学校「ベロ出しチョンマ」他、京都安養寺、祐西寺「蜘蛛の糸」、山科刑務所「蜘蛛の糸」「節分」2 回公演、泉南幼稚園「蜘蛛の糸」、高槻公民館「ベロ出しチョンマ」他、国際児童文学館「いろがみの詩」、公演等々、記入もれが多々御座いますが、又、演出・出演・公演名称等の紙面の都合上、割愛させていただきますことご諒承いただけますよう、お詫びとお願い申し上げます。

尚、二人だけの劇場セザンヌ上演全作品については HP にて記載致しております。

二人だけの劇場セザンヌ　上映作品

二人だけの劇場セザンヌ 製作　/　高林陽一 監督　映画「愛なくして」2003 年作品
　準備期間；2000 年 8 月～ 2003 年 3 月完成
大阪イマジカウエスト初号試写、東京京橋映画美術学校にて 2 回目試写、京都アバンティーホール特別披露試写、
大阪シネ・ヌーヴォ、小浜市文化会館大ホール、東京中野 ポレポレ東中野、新京極映画祭、セザンヌアトリエ にて上映

2005 年山路ふみ子映画功労賞：高林陽一 監督

　出演（出演順）
藤沢 薫、木元 としひろ、栗塚 旭、遠藤 久仁子、竹橋 団、遠藤 博圭、稗田 邦隆、浜崎 麿吉、塩見 順一、椋木 春菜、坂元 剛、大平 由佳、中武 題、村田 稔、米澤 梢、吉井 多美子

以下、4 作品高林陽一プロダクション製作
二人だけの劇場セザンヌ・ビジュアルアーツ専門学校製作協力

2005 年 6 月～ 2006 年 2 月 撮影
　高林陽一 監督・脚本「ベンチのある風景」2006 年作品
　大阪シネ・ヌーヴォ、京都映画祭、セザンヌアトリエ にて上映
　出演；遠藤 久仁子、高城 ツヨシ、村田 稔、塩見 順一、千種 みねこ

2006 年 11 月～ 2007 年 5 月 撮影
　高林陽一 監督・脚本「涯てへの旅」2007 年作品
　大阪シネ・ヌーヴォ、京都シネマ、モナコグレース劇場、セザンヌアトリエ にて上映
　2008 年　モナコ国際映画祭 ベストディレクター賞（高林陽一）
　　ベストニューカマー賞（遠藤久仁子）
　　ベストナレーション賞（作品全体として）　受賞
　出演；高城 ツヨシ、遠藤 久仁子、木元 としひろ、白石 美樹

2008 年 1 月～ 7 月 撮影
　高林陽一 監督・脚本「もうひとりの女」2008 年作品
　大阪シネ・ヌーヴォ、京都シネマ、セザンヌアトリエ にて上映
　出演；白石 美樹、高城 ツヨシ、遠藤 久仁子、吉田 信夫

2009 年 11 月～ 2010 年 4 月 撮影
　高林陽一 監督・脚本「春狂う」2010 年作品
　大阪シネ・ヌーヴォ、セザンヌアトリエ にて上映
　出演；遠藤 久仁子、隅谷 和哉、浜崎 満、中武 題、川井 奈緒美
　尺八特別演奏；倉橋 容堂

2011 年 3 月～ 7 月 撮影
　高林陽一 監督・脚本　遺作「虚空の淵で」2011 年作品
　大阪シネ・ヌーヴォ、セザンヌアトリエ にて上映
　出演；遠藤 久仁子、隅谷 和哉、中武 題、江指 由起代、今江 昭彦、野田 伊久代、藤本 芳子、
　　新井 安子、 大西 甫美

　2012 年 7 月 15 日 高林陽一 監督 逝去（81 歳）
　永い間のお見守り、ご支援に関係者一同心より感謝申し上げ、ご冥福を祈り続けております。

映画に関しまして

映画「愛なくして」撮影シーン

高林陽一 監督
としおかたかお 撮影監督
秋吉弘文 助監督

モナコ国際映画祭受賞スピーチ

ベストディレクター賞 高林陽一

ベストニューカマー賞 遠藤久仁子

モナコグレース劇場前にて

二人だけの劇場セザンヌ　歴史 新聞記事抜粋

newspaper

演劇、表現の世界を愛し、ひたすら歩み続けた35年、ご協力下さいました各新聞社様、担当記者様に深く御礼申し上げます。

(13)　3版☆　昭

「審判」に命をかけて

浜崎満　すでに連続100回上演

フリー俳優の浜崎満が、五十八年から大阪・島之内小劇場で続けているモノローグ・ドラマ「審判」は上演百回を超え、記録を更新中。

「審判」は英国の小説家、パリー・コリンズの原作で、第二次大戦中、独軍の捕虜になったソ連軍将校七人がポーランドの修道院地下室で六十日も閉じきりにされ、その間仲間の人肉を食べて生き残った一将校の衝撃的な独白だ。

セリフ七万語、二時間四十分におよぶ舞台はかつて、江守徹や加藤健一も一度挑戦したが、浜崎の連続上演は特筆される。「私も五十二歳。どこまでやれるか見当もつかないが、体力の続く限り回数を伸ばしたい」と。十二月二十二日まで毎週月曜日午後六時半から。千円。

読売新聞掲載（夕刊）　1986年9月26日（金）

夕刊　讀賣新聞　（第三種郵便物認可）

二人芝居で「ひとくわぼり」を演じる浜崎満と遠藤久仁子

人間愛描く筑豊の民話劇化

ドキュメンタリー作家の絵話もとに

炭鉱の町・筑豊で生きたドキュメンタリー作家、上野英信氏（1923―87年）の絵話を、「二人だけの劇場」を主宰する関西の新劇俳優・浜崎満と遠藤久仁子が劇化、25日から11月中旬にかけて筑豊地方を巡演することになった。同地で伝わる民話をもとにした素朴な物語だが、過酷な労働条件のもとで、たくましく生きた筑豊の人々への限りない愛情がほとばしる作品だ。

娯楽

「二人だけの劇場」主宰

浜崎満と遠藤久仁子

下旬から地元で巡演

上野氏は昭和二十二年、京大文学部を中退、筑豊炭田の鉱員として働きながら炭鉱労働者に文学運動を組織するとともに、過酷な労働条件で精一杯生きる筑豊の炭鉱労働者の姿をルポルタージュしてきた。

浜崎と遠藤の二人芝居で演じられるのは「ひとくわぼり」。上野氏が福岡県上西郷の農村に伝わる民間伝承を絵話にして昭和三十年に発表した作品。

江戸初期、ショージンという怪力男がいて、農井用の治水を代官に直訴して殺されたが父親の無念を聞くうと、銀冠屋に奉公に出る。帰郷後、村の人々から貧乏な視線を浴びせられながら、大きな鉄の鍬を作った。リショージンは代官の目の前で、川の堤防をひと鍬でぶちやぶり、念願の用水路を引き、目照り続きに泣く農民たちを救う――という話だ。農民の力の素晴らしさを説くことで、炭鉱労働者たちへの励ましを送った作品でもある。

三時間に及ぶ一人芝居「審判」を二百回以上もこなし、関西演劇界で異色の活動を続けている浜崎は「寓話のようだが、上野さんは『人間やる気があればなんでもできる』ということを訴えている。権力への復讐に燃えるショージンに母親が『そんなことしても村のために何にもならん』といさめる。母と子のドラマでもあり、現代人に欠けた深い人間愛がある」と劇化の動機を語る。

新たに原作を脚本化することを通じ、文中の言葉を丹念にひろいあげて立体化させた。ナレーションを遠藤が受け持ち、浜崎が登場人物（六人）の全役を受け持つ。すでに七月下旬に筑豊地方の三カ所で試演会を終えている。

舞台は上野氏とともに絵話を共作した版画家、千田梅二氏のな視線を浴びせられながら作品を背景に使用するだけ。白い貫頭衣を着て、ギリシャ劇的な趣を出すと同時に、能舞台のような登場によって、時代を超えた普遍的な愛の物語を強調することも狙っている。

公演は筑豊地方の四十カ所で行われる予定で、劇場は使用せず、寺院や公民館、中学校、個人の家で上演される。来年五月には、京都や大阪でも上演を計画している。

読売新聞掲載（夕刊）　1991年9月19日（木）

（1）7版　（明治25年3月17日第3種郵便物認可）　第39428号　京

人プリズム

新劇俳優・
二人だけの劇場主宰

遠藤 久仁子さん

△星がしきりに流れる高い天から、数しれぬ多くの手がのびて、優しくショージンさんの魂を抱きかかえて静かに昇っていきました…。澄んだナレーションが流れる。

「涙がたまってどうしても声が詰まってしまう」

遠藤さんが語り、浜崎満さんが演じる二人芝居「ひとくわぼり」のラストの一シーン。心が溶け合い舞台と客席は感動で一体となるはずだ。

―九州筑豊の貧しい村。ショージンと呼ぶ農民が「一鍬だけ許す」という代官の嘲りの中で一鍬で堤防を切り、水を入れ日照りで苦しむ農民を救った。

筑豊に生きた作家故上野英信さんと木版画家千田梅二さんがヤマ（炭鉱）の廃屋で綴った昔絵物語「ひとくわぼり」。虐げられた人間の魂の叫びと死…感動的なこの物語を今度初めて劇にした。

「クワで壊がきれたように…私たちの芝居もそうありたい」。京都市南区の小さな稽古場。初演の九月筑豊公演を前に裏藤の練習が続く。怒りの大声、涙、不安が渦巻く。一体どうも激しく芝居に駆り立てるものは何なのか。

「四、五千円もする芝居の券。こんな大金が出せない人に見てもらえる芝居づくりをしたい。好きでも貧しくて見に行けない人は自然、芝居から離れて行くと思うから」。大劇団でなくても芝居はできる。そのためには、ほとばしる魂の芝居をしないと。

奇しくも筑豊出身。十九歳の時、演劇をやりたくて京都に。今、「すばらしい芝居にめぐりあった」という。

常にほとばしる魂

結婚。出産。教師になろうと二十五歳で大学に入り免許もとった。が結局「体ごとぶつけられる」道に。苦悩しながら仲間と月一回円山公園しだれ桜前で野外劇を続けた。

このような中で巡り会ったのが二時間半に及ぶ一人芝居「審判」を二百四回も演じ、「日本一の役者」と尊敬する関西のベテラン新劇俳優浜崎さん。六年前、八十七回公演から遠藤さんが制作を担当、審判続演を支えた。

「今、演劇が企業付きになっているが、私たちは原点に立ちたい」浜崎さんはいう。

「家族、心ある人が必ず支え守ってくれる」遠藤さん。芝居の未来を信じて生きる。

（文・松本 忠之）
（写真・板東 勇）

京都新聞掲載（夕刊）　1991年8月9日（金）

(19) 13版　家庭とくらし　1993年(平成5年)　11月20日(土曜日)　読売

愛をテーマに二人芝居

子供たちに心の豊かさを

京都市南区東九条中札ノ辻町、浄土宗・地蔵院本堂。子供たちや親子連れが、期待に目を輝かせて前方の〝特設舞台〟を見つめる。「コーン、コーン」一鐘の音を合図に、二人だけの子供たちに贈る小さな劇場」の開演だ。

演じるのは浜崎満さん(五)と遠藤久仁子さん(三)。二人は関西を拠点に十年前から、子供たちに優れた文学作品を伝えたいと、全国各地の学校などで公演を続けている。豊かな愛をテーマにした二人の「芝居」に共感した住職の林準芳さん(四)らが、七月から月一回本堂を提供、小さな劇場がスタートした。

原作を脚本化せずにそのままの言葉、原稿で語る独特の手法。もちろん、朗読や放送劇とは根本的に違っている。照明など最低限の舞台装置の中で、体全体を使って語ることで、作者の思いを演じるのだ。

「一般に演劇は、脚本があってそれを演じるのが役者。ですが、戯曲化されていない作品の中にも、いいものがいっぱいあるそれをいかに伝えていくか。それが私たちの語りなんです」と浜崎さん。だから詩でも上演が可能になる。

舞台はお寺 文学作品上演

芥川龍之介の「蜘蛛の糸」、上野英信の民話「ひとくわほり」、斉藤隆介の「ペロ出しチョンマ」などの散文作品に加え、大阪府高槻市在住の詩人、野呂昶さんのいろがみのうた」も、この劇場で意欲的に演じている作品だ。

「いろがみのうた」は遠藤さんの独演。野呂さんが、それぞれの色に託したあふれるやさしさを体いっぱいに表現する。耳で聞き、目で見ると、詩のイメージがさらに広がる。

その詩を口ずさむ子どもたちの表情。演者と観客が一体化する瞬間。遠藤さんが言う。「色という抽象的なものを、演じるとで具象化するのはとても難しい。やめようと思ったこともありますが、一緒に涙を出してくれる子供たちが助けてくれるんです」と。

この劇場は十年間続けるのが目標。二人は「舞台を通じて、子供たちに様々な色、心の豊かさを体いっぱいに感じ取ってもらえれば。多くの親子に見てもらって、コミュニケーションを深めてもらいたい」と願う。

浜崎さんは「十年の内には、観客が一人もいない場合があるかも知れない。でも、本当に伝えたいものがあれば、そこに舞台があるのです」と話す。

原作者の野呂さんは「草の根の文化にとって、寺を舞台にした小劇場は最も望ましい形の一つ。昔は寺が地域文化の中心だったんだから」と、二人の活動にエールを送る。

小さな劇場が開かれるのは、毎月第二金曜日の午後六時二十分から。十二月は「ひとくわほり」と「いろがみのうた」を上演する予定。入場料は高校生まで五百円、大人千円。問い合わせは、地蔵院

体全体を使って詩や文学作品を語り続ける浜崎さん(左)と遠藤さん(右)

読売新聞掲載　1993年11月20日(土)

灯

ろうそくの明かりだけが揺れる薄暗い本堂では、芥川龍之介の「蜘蛛（くも）の糸」が上演中だった。京都市南区の地蔵院というお寺を先夜、訪ねた。

一人芝居「審判」で知られる新劇俳優の浜崎満さん(六〇)と遠藤久仁子さん(三九)が、近所の人たちを前に、ここで月一回開いている小劇場。二人は文学作品を劇にして、二人芝居で演じる。激しい動きが皆無の振動でじかに伝わってくる。演じる側と見る側が互いに触れ合えるような親近感がここの特徴だ。

「十年間は続けたい。低料金で一人でも多くの人に劇の楽しさを知ってほしいから」と二人。入場料は子供五百円、大人千円。五月からは昨年に続いて、円山公園で野外公演も始める。二人の劇はここでも多くの感動を呼ぶのではないだろうか。

京都は近世演劇発祥の地ともいわれる。出雲のおくにが四条河原で演じた「おくにかぶき」は、歌舞伎の元になった。近代も、さまざまな劇団が活躍し、京都は演劇分野でも特異のエネルギーを発揮してきた。

平安建都一二〇〇年の今年三月には、京の町をステージに「芸術祭典・京」が開かれ、演劇などで芸術の町・京都をアピールした。しかし、近年の東京一極集中化は演劇などの分野も例外でないと言われる。

京都復権が今、いろんな面で問われている。京都の一面を形づくってきた演劇などの世界もそうだろう。しかし、浜崎さんらを見ていると演劇のエネルギーはひっそりとだが、確実に継がれている。しかも草の根という原点で。京都を舞台に独自に演劇普及に挑む二人に、新しい「京都のおくに」のような存在になってほしいと思った。

（松本　忠之）

ともしび

京都新聞掲載（夕刊）　1994年4月14日(木)

二人だけの劇場セザンヌ　歴史 新聞記事抜粋

newspaper

第3種郵便物認可

ピンスポット

言葉の力を伝えたい

京都を拠点に活動する劇団「二人だけの劇場セザンヌ」を主宰する。今年、結成25周年を迎え、南区のアトリエで記念公演を年末まで開催中だ。

この25年間、「生活に溶け込む演劇を」と、東山区の円山公園でベテランの浜崎磨吉さんや若手らと毎月、無料野外公演を続けてきた。しだれ桜前の広場にシートを敷き、一人芝居や群像劇を演じる。セットも音響もなく、役者のせりふと動きだけで勝負する。数十人の人だかりができるときもあれば、一人も観客がいないときもある。

「それでも負けずに懸命に演じます。すると歩行者が足を止めて見入ってくれ、中にはカンパしてくれる人も。円山は私の原点。死ぬまでやり続けたい」と語る。

劇団名の「二人だけの劇場」は、舞台一人、観客一人、合わせて二人の意味。演じ手と観客が一緒に作り上げるのが演劇との思いを込めた。

これまでの公演回数は1100回近くになる。貫くのは「言葉の持つ力を伝えたい」との願いだ。「一つの言葉が生涯の希望につながることもある。せりふに込められた作者の思いを伝える使命が俳優にはあります」

5月のアトリエ公演は25、26日午後7時、27日午後3時開演。井伏鱒二作「山椒魚」などを舞台化して演じる。1800円。8月を除き12月まで毎月末の金・土・日曜にアトリエで公演する。円山公園での無料野外公演は6月9日午後2時から。同公園では9～11月の第2土曜にも公演する。問い合わせは同劇団（075・672・3426）へ。（池田洋一郎）

新劇俳優　遠藤　久仁子さん

ひと（わかぼ）

朝日新聞掲載（京都版）　2007年5月17日（木）

霊　新　聞

空襲、婚約者の戦死

「いくさと青春」一人芝居

あすから南区　女優　遠藤久仁子さん

一人芝居「いくさと青春」を練習する遠藤さん（南区で）

戦後65年 京都

京都の劇団「二人だけの劇場・セザンヌ」を主宰する新劇女優の遠藤久仁子さん(56)が28～30日、自らのアトリエ（南区東九条北烏丸町）で、戦時下を生きた若い女性の姿を描く「一人芝居 いくさと青春」を上演する。

平洋戦争末期、福井県敦賀市の軍需工場で寮母をしていた作者が、激しい空襲で経験した仲間の死の水柱」（洛西書院）。太原作は、真田正子著「花や、出征した婚約者の戦死など過酷な体験をつづっている。

遠藤さんは1983年、劇団を創設。2007年からアトリエでの公演を開いている。原作を読み「戦争中、市井の若い女性がどのような思いで生きていたかを、戦争を知らない世代に伝えたい」と企画した。

公演では、遠藤さんがもんぺ姿で作者の真田さんを演じ、体全体を使って語る。遠藤さんは「戦後生まれの自分にできるのか自信がなかったが、終戦から65年がたち、実体験をした人の言葉を少しでも語り継ぎたいと思った」と話している。

「いくさと青春」は6月25～27日、7月23～25日、8月27～29日にも上演。金、土曜日は午後7時、日曜日

読売新聞掲載（京都版）
2010年5月27日（木）

の味が光る珠玉の舞台2題　京都▼

来月11日

もの思う秋。10月11日は、京都や大阪で心に染みる語り芸と、風に揺れる木々の音をBGMに続いてきた野外劇で深まる季節をたん能しよう。ベテランの味が光る珠玉の2企画を紹介する。（河村亮）

「二人だけの劇場セザンヌ」が20年　記念公演で華添える　円山公園

「二人だけの劇場セザンヌ」が今秋、京都市東山区の円山公園しだれ桜前で毎月の野外公演を始めて二十年を迎えた。主宰の遠藤久仁子や浜崎磨吉、若手が記念公演「プロポーズ」（チェーホフ作）を上演し、華を添えている。

新劇を学んだ遠藤が、生活に自然に溶け込む演劇を、と観光客や市民が憩う公園で始めた。毎月一回、暑い昼下がりも、寒い夕べも。青空や風を背景に、とりたててセットも音響もない。衣装も豪華ではない。ダンスやハイテク照明、大仕掛けな芝居が多いなか、ひたむきに動きとせりふだけで世界を紡ぎ出す。

出し物は二人芝居、一人芝居、群像劇。演劇界での立ち位置や、現代社会の演劇の居場所を探り続ける。遠藤は長十一月まで。遠藤、浜崎ら関西の新劇俳優が出演する映画「愛なくして」（高林陽一監督）も十月公開される。

しだれ桜と空に見守られて。20周年記念公演「プロポーズ」（京都市東山区・円山公園）

婚約といううめでたい設定と、愚かさの対比が皮肉で鮮やかだ。「心にほのかな笑いのプレゼントをしたい」という。一日二回公演。求婚される令嬢ナターリヤを遠藤が演じる。一回目は若手（中武顕、村田稔）、二回目はベテラン（浜崎、塩見順一）が出演する。

十月は十一日午後一時半と三時開演。無料。記念公演は十一月まで。遠藤、浜崎ら関西の新劇俳優が出演する映画「愛なくして」（高林陽一監督）も十月公開される。

ず、迎えられたことがうれしい」と万感迫るようだ。

人間の心理の神秘さや、逃れ難い本性を描く「プロポーズ」は、セザンヌらしい演目。ささいな争いから、人間の欲深さをあぶり出す悲喜劇だ。

京都新聞掲載（夕刊）　2003年9月30日（火）

9 文化 第3種郵便物認可 ‥94

私のモノがたり

「二人だけの劇場セザンヌ」主宰　遠藤久仁子 さん

新劇の志を励まし支えた「心のつえ」

劇団「二人だけの劇場セザンヌ」が今年、結成30周年を迎えた。演者と観客、二人だけで成立する世界。作家藤本義一さんが付けた劇団名は、劇団の志そのもの。野外で、劇場で、せりふと身体だけの表現を追求し、京都でも数少なくなった新劇の灯を誠実に守る。主宰の女優遠藤久仁子さんを支えてきたのは、応援者や先人の言葉だという。

なかでも、詩人で児童文学作家の故山本和夫さんのはがきは、心のつえだ。赤い鳥文学賞受賞の山本さんは、劇団に「からすは天才である」などの作を書き下ろした。そのはがきは多くが励ましの文面で、観音像や花など味わいのある自筆の絵が添えられている。「苦しい時に何度も救われた」と、大切に額に入れる。東京に憧れた時は「東京に行くのでなく、東京から人が来るような俳優になれ」と諭されたという。

「山本先生は、『戦争中、敵に捕まったとき自分は詩人だと言ったら、助けてもらえた。だから、僕は生涯、戦争で亡くなった人の思いも込めて文学をやっていく』とおっしゃっていた」。遠藤さん自身、一生をかけるものを考えたとき、演劇しかなかった。

「遠藤君、人間は美しく生きなければいけない」ともよく言われた。「芝居は自分。人生の哲学や生き方が表れる。その『自分』は、過去に出会った人たちの蓄積でできているんです」。自宅や楽屋には新劇の大俳優、故宇野重吉さんや故杉村春子さんの舞台写真のほか、芝居の演出、映画も一緒に手がけた映画監督の故高林陽一さんゆかりの品など、遠藤さんを形作ってきたものが飾られる。

5年前から京都市南区のビルの2階を借り、けいこ場として使っている。4～7月、9～12月の月末にはアトリエ公演を行う。研究生も12人に増えた。秋に新作演劇と、短歌をモチーフにした朗読を公演する。

この30年で演劇を取り巻く状況は大きく変わったが、新劇にこだわる。「体の中から発する新劇の言葉は、人の心に刺さるんです」。新劇の灯は消さない、と誓う。

（河村亮）

詩人山本和夫さんからのはがき

えんどう・くにこ　1954年福岡・筑豊出身。19歳の時に演劇を志して京都へ。新劇を学び、「二人だけの一」を結成。劇場公演、アトリエ公演の傍ら、円山公園で野外公演を続ける。現在は劇団員6人で活動する。

京都新聞掲載「文化欄」　2012年9月30日（日）

凡語

京都市南区東九条、本屋の2階。小説や詩集が並ぶ部屋が舞台場兼劇場だ。照明が落ちて一人芝居「花の水柱」が始まった。女優遠藤久仁子さん（57）が、戦後を生きたある女性の半生を語り出す▶口べらしのような結婚。働き、子を養い、焼け跡に家を建てた喜び…。役を生きる遠藤さんの力ある声に引き込まれ、往来の音が遠くなる。今秋、創立30周年を迎えた劇団「二人だけの劇場セザンヌ」の記念公演を見た▶遠藤さんは19歳で、演劇を志して京都に来た。俳優浜崎潜さん（77）と旗揚げした劇団は、円山公園での無料公演を柱に据えた。役者は演じる意志さえあれば場所を問わず、客も家庭に文化に触れてほしいとの願いからだ▶九州の炭鉱の民話を基にした「ひとくわぼり」の地方巡演や寺の本堂での子どもに贈る芝居を地道に続けた。「蜘蛛の糸」「ベロ出しチョンマ」など有名作に加え、隠れた短編も発掘して演じた▶簡素なセリフ。だが、言葉を大切にした舞台に心打たれた人は多い。苦しみや悩みを背負いつつ、幸せを願わずにはおれぬ。そんな人間の営みを演じたい。劇団員の死などを越え、セザンヌは31年目の日々を歩み始めた▶公演「花の水柱」は25～27日、12月23～25日も上演される。遠藤さんのせりふを通して、観客は世代を超え、登場人物に自分を重ねるだろう。「二人だけ…」の劇団名には「役者と観客。わたしとあなた」の意味が込められている。

京都新聞掲載「凡語」　2011年11月24日（木）

共に舞台に立った
裏で支えてくれた仲間達

浜崎満

塩見順一

田中薫

隅谷和哉

（故）村田稔

（故）野田伊久代

1980 年代　浜崎満　木元としひろ　平野明美　村田稔　大澤輝一　森尾直明　石黒丈喜
三田己絵

1990 年代　浜崎満　村田稔　塩見順一　田中薫　山本仁美　辰巳幸子　山田葉子
白川美佐子　中武題　遠藤博圭　岡本愛子

2000 年代　浜崎満　村田稔　隅谷和哉　中武題　佐々木思郎　曽我部勇介　神岡進吾
玄田公子　大西甫美　野田伊久代　湖空雄大　江指由起代　藤本芳子
矢木雅人　新井安子　海北康　新町冴子　小川沙葉　遠藤博圭
フク・ヒロ　福島和代　倉田悠々　中武裕華

2010 年代　浜崎満　中武題　曽我部勇介　大西甫美　野田伊久代　湖空雄大
江指由起代　新井祐介　矢木雅人　新井安子　新納絹子　上戸義海　乾和広
森下樹　溝江拓斗　西田梓　遠藤博圭　中武裕華　佐々木思郎　塩見順一
田中薫　佐藤竜治　坪山正文　酒井遥

光あふれる　今ここに（祝婚歌）

作詩・曲　吉井多美子

一　光あふれる　今ここに
幸せあれと　ベルが鳴る

二　若い二人の　道はるか
手を取り合って　ゆきましょう
けわしい山も　二人なら
楽しい日々と　なるでしょう

三　若い二人の　夢はるか
愛を重ねて　ゆきましょう
新しい命　すこやかに
楽しい日々が　続くでしょう

四　喜びあふれる　今ここに
幸せ続け　いつまでも
幸せ続け　いつまでも

ー お知らせ ー

◆ 二人だけの劇場 セザンヌでは各種学校公演（幼・小・中・高・大学生）、図書館、お寺、公民館等の依頼公演を行っております。
お気軽にお問い合わせ下さいませ。

◆ 演劇・朗読体験教室のご案内 ◆　ー緒に学び、体験してみませんか

きっと貴方のきづいていない新しい自分を発見できるかもしれません。

1：朗読・演劇を専門的に学んでみたい方
2：自己表現・感情表現の苦手な方
3：人前で喋れないコンプレックスをお持ちの方

Monaco International Film Festival
2008

モナコ国際映画祭にて受賞
「涯てへの旅」
：出演：
高城ツヨシ・遠藤久仁子・木元としひろ・白石美樹
：スタッフ：
監督 高林陽一・撮影 としおかたかお・助監督 秋吉弘文・アシスタント 福田健太・遠藤博圭
Best Director 賞：高林陽一
Best Newcomer 賞：遠藤久仁子
Best Narration 賞：「涯てへの旅」（作品全体としていただきました）

四季

作：ふく ひろ

春には　野原に草花が咲き
夏には　太陽が海に輝き
秋には　山々が紅く燃える
冬には　河川に薄く氷が生まれる

爽やかな風が吹き抜ける春
ピチピチと魚が飛び跳ねる夏
ひらひらと色づいた葉が落ちる秋
はらはらと白い天使が降りてくる冬

これが日本の季節
これが私たちの生まれた大和

春には　お茶の葉が青く茂り、山菜が萌える
夏には　空に花火が上がり、スイカを頬張る
秋には　果実が木々に生り、きのこが生える
冬には　もちつきの声がして、カニを茹でる

高らかに春を告げるうぐいす
短い夏を泣き続ける蝉
夕日に染まり秋を舞う赤とんぼ
白い冬色に姿を変える雷鳥

これが大和の季節
これが私たちの生きている日本

でも、この素晴らしい四季の移ろいがわからない
いま、この美しい四季が消えようとしている

この大和の国が、日本という国が
どこに向かおうとしているのだろうか

行き先の見えない暗黒の世界に
出口のわからない迷宮の迷路に
迷い込んでしまうのだろうか

若者たちよ
今こそ、その目でしっかりと見てほしい

そして、この美しい大和の国を
このかけがえのない日本の国を

君たちの手で、
守り続けてほしい

日本の四季を
大和の四季を

私たちの生まれた大和を

― セザンヌアトリエ　春・秋定期公演のご案内 ―

毎年　4・5・6月
　　10・11・12月　月末の土・日曜日
土曜日　13:00 及び 17:00 から開演
日曜日　15:00 から開演　（開場は開演の30分前です）

◆ 二人だけの劇場 セザンヌ ◆

・セザンヌ 事務所
〒601-8014 京都市南区東九条河西町43番地
tel/fax　: 075-672-3426
mail　: cezanne1983@ybb.ne.jp
homepage: http://www.cezanne1983.com/

・セザンヌ アトリエ
〒601-8017 京都市南区東九条北烏丸町33番地
BOOKS ENDO 2F
tel　: 090-6665-8112

二人だけの劇場セザンヌ創立 35 周年記念誌
パンフレット制作協力　洛西書院（パンフレット発行 2016/11/6）